

一 般 演 題 抄 錄

11. 下垂体嚢腫による ADH 不適切分泌症候群の 1 例

小林光男 坂本 円 西村明芳 岸谷 譲 池田和人
雑賀豊彦 今村 稔 大野恭裕 青木矩彦

近畿大学医学部第 2 内科学教室

症例は69歳、女性。主訴は脱力、意識障害。生来健康であったが、平成8年8月に水様性下痢出現、翌日より頭痛を伴うようになった。上記症状持続するため近医受診するも症状治まらず、その後、嘔吐も伴うようになり他院に入院。入院時検査で、低 Na 血症を認めた。NaCl を補給していたが、改善せず脱力感、意識障害も出現したため当科に紹介入院となる。既往歴は、20歳台に肺疾患、59歳頃より時々不整脈を自覚していた。身長150 cm、体重49 kg、血圧106/60 mmHg、脈拍61/分整、意識 清明、貧血、黄疸なし、皮膚色素沈着なし、腋毛、恥毛粗。心肺・腹部異常なし、神経学的所見異常なし。入院時検査では、白血球での相対的リンパ球の増加、血沈55、CRP 8.9と炎症所見あり。生化学検査では血清 Na 118、Cl 87と低下を認め BUN 5、Crn 0.5と低値を示していた。CEA、SCC、NSE は正常であった。尿検査異常なし。髄液検査異常なし。ツベルクリン反応

陰性。内分泌学的検査では ACTH 8、コルチゾル 22.7と正常、GH は0.2と低値、甲状腺は TSH 1.1、freeT3 1.7、freeT4 0.8と low T3 症候群を呈していた。TRH 負荷試験は正常反応、CRH 負荷試験で、コルチゾルの低反応、LH-RH 負荷試験で LH、FSH ともに低反応、GRH 負荷試験で、GH の低反応を認めた。頭部単純 MRI では下垂体に 2×3 cm の腫瘤を認め、下垂体茎を右に圧排していた。造影 CT では均一な低吸収域であり、嚢胞性腫瘤と考えられた。血中 ADH 0.8、血清浸透圧270、尿浸透圧304、尿中 Na 排泄が40-130と高値であること、腎機能、副腎機能が正常であることより SIADH と診断し、水制限によって低 Na 血症は改善したが血中 ADH は変化が認められなかった。以上より本例の SIADH は下垂体嚢胞性腫瘤の圧排が正常下垂体茎に何らかの作用を及ぼし、ADH の不適切分泌を生じさせた事によると考えられた。

12. 当院における MRSA の分離頻度および ABK と他薬剤の相乗効果について

久保 修一 川上 朋子 前野 知子 山本 ちかこ 松田 和美
佐藤 かおり 秋山 利行 古田 格* 大場 康寛*

近畿大学医学部附属病院中央臨床検査部 *近畿大学医学部臨床病理学教室

はじめに

本年4月の医療法改正により院内感染対策費が計上できるようになり、当院でも7月より各病室に擦込式手指消毒剤(ウエルパス)が設置された。そこで今回我々は、MRSA 分離頻度の調査、及び本菌の治療薬として ABK をより効率良く使用するために各種抗菌薬との併用効果について検討したので報告する。

対象および方法

1. MRSA の分離頻度

1993年1月から1996年11月に当検査室で検出された MRSA について検体別、月別に分離頻度を調査した。同一月内の重複検出は一件として計上した。

2. ABK との併用効果

臨床分離 MRSA31 株を用い、各薬剤の常用投与時の3時間後の血中濃度比を保つように2倍連続希釈した2薬剤混合マイクロプレートを作成し、微量液体希釈法により併用時の MIC 値を測定した。抗生剤は FOM、IPM、PAPM、FMOX、CTM、MINO、ABPC、CFPM を使用し、単独使用時の MIC 値と比

較した。

結 果

1. MRSA の分離頻度は、MRSA/(MRSA+MSSA) の割合でみると1991年の85%をピークに92年69%、93年73%、94年69%、95年69%であったが96年には83%と増加していた。
2. 検体別分離頻度では、喀痰が最も多く MRSA 拡散経路として最も重要であると思われた。
3. 月別分離頻度ではウエルパスが設置された本年7月以降も明らかな変化は見られなかった。
4. ABK と他薬剤の併用効果は、FOM、MINO およびカルバペネム系が優れており、 β -ラクタム剤であれば SBT/ABPC との併用が最も期待される結果となった。

ま と め

当院において MRSA の分離頻度は依然として高く、対策の不備が伺われた。喀痰を対象とした場合 ABK の単独投与では効果が期待できないため、併用療法なども考慮する必要がある。